

NPO 法人 高齢社会をよくする女性の会 会報

No.165 2006年2月発行
NPO法人高齢社会をよくする女性の会
〒160-0022 東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL. 03-3356-3564
FAX. 03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477



—目次—

「朝日社会福祉賞」受賞について（お礼）……………	1
歳末名物「女たちの討ち入りシンポ」……………	2
ひとりから広がる多彩ななっとうワーク 世代をつなぐ～おひとりさまトーク 基調講演／ひとりの人口学・いま未来 阿藤誠 寸劇・シングルまんだら全5帖	
男・老いを語る@中神義三……………	7
本の紹介……………	8

「朝日社会福祉賞」受賞について（お礼）

NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長 樋口恵子

今年 は 格 別 に 厳 し い 寒 さ と な り ま し た が、皆 様 お 健 や か に 新 春 を お 迎 え の こ と と お 慶 び 申 し 上 げ ま す。

こ の 度、私 た ち 「高 齢 社 会 を よ く す る 女 性 の 会」 は、2005 年 度 朝 日 社 会 福 祉 賞 の 受 賞 団 体 に 選 ば れ ま し た。

こ こ に、会 員 の 皆 様 に お 知 ら せ 申 し 上 げ ま す と 共 に、こ の 受 賞 は、会 員 す べ て の 方 々 の 本 会 へ の ご 参 画 の 賜 と し て、厚 く 御 礼 を 申 し 上 げ ま す。

思 え ば、1982 年 9 月 10 日 の 第 1 回 女 性 に よ る 老 人 問 題 シ ン ポ ジ ウ ム、翌 83 年 3 月 18 日 の 本 会 創 設、2005 年 1 月 7 日 の NPO 法 人 化 を 経 て 現 在 に 至 る 四 半 世 紀、前 人 未 踏 の 超 高 齢 社 会 へ の 対 応 と 構 築 に 向 け て、私 た ち は、地 域・家 族 と い う 人 生 の 現 場 か ら、女 性 の 視 点 を 踏 ま え て 実 践 し、提 言 し つ づ け て ま い り ま

し た。

超 高 齢 社 会 へ の 道 程 は、こ れ か ら こ そ が 本 番 で あ り、国 際 的 に は 「地 球 ま る こ と 高 齢 化」 が す す む 中 で、私 た ち が 取 り 組 む 課 題 は 山 積 し て い ま す。

今 回 の 受 賞 を 契 機 と し て、会 員 の 皆 様 と 一 層 の 協 力 を 深 め、交 流 を 広 げ、新 た な 活 動 を 展 開 し て い き た い と 存 じ ま す。

全 国 の 皆 様 か ら、早 速 に 祝 電 や お 花 が 届 き、運 営 委 員 一 同 喜 び を 倍 加 さ せ て い た だ き ま し た。

喜 び は、共 に す る 人 が 多 け れ ば、そ れ だ け 大 き く な り ま す。

喜 び の エ ネ ル ギ ー は、さ ら な る 夢 を、大 き く 広 げ ま す。

2 月 9 日 の 「と も に 喜 び あ う 会」 で、皆 様 に お 会 い で き ま す の を 楽 し み に い た し て お り ま す。

ひとりから広がる多彩ななっとうワーク

平成17年12月10日——女性と仕事の未来館

「ひとり」は今や社会の大勢力。とくに老いて女性のひとり暮らしは5.6人にひとりです。にもかかわらず、世の中はまだ税制から介護保険料まで世帯主義。そうした制度の矛盾を指摘しつつ、われら女性の立場から、「ひとり」が快適に生きる条件を語り合いましょう。

内容は「おひとりさま」トーク、人口学の第一人者に聞く「ひとりの未来学」、そしてご存じ「寸劇シンポ」で、「ひとり」を縦横無尽に解明し、新しい家族・地域・社会の創造に向けて——討ち入りです。

世代をつなぐ「おひとりさま」トーク

吉沢 久子 (本会理事、生活評論家)

松原 惇子 (SSSネット代表理事)

渥美 雅子 (女性と仕事の未来館館長)

コーディネーター・樋口 恵子 (本会理事長)

樋口：巷に鳴るのはシングルベル、今日

ここに打ち鳴らすのはシングルベル。シ

ングルから発するメッセージでございます。

2005年の推計によりますと、日

本の65歳以上の270万人が1人暮らし

をしておりまして、これは男性の10人に

1人、女性の約5人に1人にあたり、そ

の数は今後益々増え、2015年には5

00万人になるといわれています。この

ようなシングルが増える高齢社会を生き

る我々は多彩なネットワーク※「なっとう

ワーク」を作っていくかねばなりません。

まずは1人暮らしの心得について一言ず

つ。

吉沢：私、65歳のときに夫と死別して1人暮らしをしておりまして、もうすぐ88歳。すでに成人式を過ぎております。

私は夫が亡くなったときも申し訳ないくらいそんなにショックではなかった。

それは夫がいるときからまったたく夫に頼っていたいなかったということに尽きるのだらうと思います。

逆に、夫のために縛られることがない自由は家族からもらったプレゼントなのだ、これを大事にして前向きに生きていかなければならないと思いました。

私の場合は仕事があり、夫が晩年に志を同じくする仲間と作った勉強会があ

※ 中津川市社協事務局の千葉忠道さんの造語。「一粒一粒の顔が見え、無数の粘り強い糸を引く、納豆のごときネットワーク」

り、特に喪失感もなく乗り切ってきました。無いものをねだらない、今あるものを数えて生きていこうと思っております。

松原：私は、大学卒業後すぐ結婚して1年で見切りをつけ、以後、自分らしさを求め続けてきたらずっと1人だったという感じできています。シングルはシングルだけれど、最後までは1人で生きられない。そこで、最近「シングル・スマイル・シニアライフ：3Sネット」を結成しました。これは同じ価値観・個を生きることが出来る仲間がネットワークを作る会です。中には不安が趣味みたいな人がいるんですね。1人で倒れたらどうしよう、右足がなくなったらどうしよう、とかね。じゃそれらの不安を1つずつ潰していこうと。まずお墓。それで会ではバラいっばいの喫茶店のようなお墓を作りました。次は災害。シングルの人はオヤジとまったく同じ、地域とのつながりが全くない。それで近隣の地区の会員同志でグループを作って災害時の助けあいネットを作りました。いざとなったら誰

かが来てくれるんだという安心感、これが一番大事だと思っています。

渥美：夫が脑梗塞ですので、夫が死んだら帖というのを作っています。これまで夫が家のことを随分やってくれていたものですから、例えば電気機器が故障したとき、家計簿の付け方、財産管理の仕方等々を書き留めています。そして、夫の指導のもと予行演習をしております。

■ポチタマ残しては死ねません

樋口：最近、お年寄りが認知症になったり、亡くなったりしたときの、ペットの措置のことを聞くと心痛みます。

松原：私もこの間、長年飼っていた愛犬を亡くしました。また飼うとしたらこの先20年責任もてるかな…と。自分のライフスタイルを変えることも大切なことかなと。つらいですね、年とるの（笑）。

吉沢：私も大好きな犬は諦め、メダカを飼っています。

樋口：なるほど。私はいつも人生諦めないでといい続けてきた側ですが、若いとは何らかのものを手離していくプロセスでもあるのですね。

■最後は1人の覚悟です

樋口：これからは、家族や伴侶がいようと最後は1人になるのだと覚悟しなければならない時代なのだとつくづく思います。しかも呆けた後もし決して短くない。

渥美：一つ皆様にお奨めなのは、元気なうちに、任意後見人を、できれば任意後見監督人を付けることです。ポチタマの世話も一緒に任せられる人に任せばいいです



左から樋口さん、吉沢さん、松原さん、渥美さん

ね。

樋口：当会は全国にネットワークがあるので、将来的には会員が順番に後見人になって地域で支えあえるようになればいいなあと思っております。

松原：もちろんうちの会でも検討しております。ところで、私は最近、最後は自宅だと考えるようになりました。シングルの良さって発見されなかったことなんです。下手に発見されるからチューブにながれて死ぬに死ねなくなる。人に気を使いながら死ぬなんてイヤなの。これは私の美意識。

渥美：松原さん、それならば是非遺言を作っておいてください。そういう場合、後の整理が大変。個人情報保護法の時代で、相続人を探すのも大変ですから。

■さいごに

樋口：本日はありがとうございました。1人でいるときびしいかなと思つていましたが、今日のお話で60、70を過ぎても困ったときに助け合うネットワークがいくらでもできるということがわかりました。どうぞ、今日の会が有意義だったと

思われる皆様、当会にご入会され新しい「なつとうワーク」を作られますことを、最後にお願ひいたします。

団塊の世代の新しい死生観、価値観に刺激されながらも、80歳代の吉沢さんの心温まる珠玉の言葉の数々、その間でもまだ（失礼！）揺れ動く樋口理事長、渥美館長、あとひくトーク会でした。

（久留牧子・記）

基調講演

ひとりの人口学・いま未来

阿藤 誠（早稲田大学特任教授）

阿藤誠先生は、現在早稲田大学特任教授、前任は厚生労働省社会保障人口問題研究所長で、人口問題についての第一人者、用意された資料はまるでチンプンカンプンの謎めいたA4紙1枚で、まだら帖より分からない（笑い）と樋口理事長の講師紹介。

開口一番阿藤誠さんは、「日頃、政府機関にも関係し男女共同参画社会の推進を論じているのに、個人的には実践でき



疾風の如く現れて、翔ぶが如く去っていった阿藤先生

ず内心忸怩たるものもあり、今日の要請には万難を排しても駆け付けねばならなかった。今日は樋口さんに拉致されたのです（爆笑）と冒頭からユーモアをまじえて、「ひとりの人口学」について基調講演をされた。

人口学研究会の学会を途中で抜け出し、すぐ戻られるというハードスケジュールでご登壇くださった先生のお話は、興味津々。一見チンプンカンプンの資料

を次々説き明かして、会場はさながら大学のキャンパスに早変わり。熱心にメモを取っていました。

「ひとりの人間」の人口学

「ひとりの人口学」は、学問上成り立つのか。こたえはイエス・オア・ノー。1人きりになった人間が死を待つのみでは人口学は必要ないが、人間が1人しかいなくなるまでの人口学は考えられる。日本では少子化により人口減少開始のカウントダウンの時期と共に、2005年の国勢調査の結果も注目される。

日本でこのまま少子化が続くと100年は減り続ける。そしてこのまま人口減が続いたら、日本人が1人になるのはいつのことか。

現在の人口が1億2800万人弱。合計特殊出生率1.29、平均寿命女性85歳、男性78歳が続き、外国からの出入国がないとして計算すると、100年後4080万人、200年後840万人、700年後3000人、計算上たった1人の日本人が登場するのは西暦3200年。この人は多分100歳以上の女性だろうと

思います。ここに無人島の日本列島が生まれる。1人の人口学の解釈は1000年以上先の話です。

「ひとり者」の人口学

少子化とともに未婚化の問題もあります。2000年の統計で、20代後半の女性の未婚率54%（1970年には18%）、男性67%（70年には47%）。30代前半の女性の4人に1人は未婚です。

また生涯未婚率（50歳の時点で未婚者は女性で6%、2025年は17%の予測で、男性は同じく13%、↓22%ぐらいに。

「ひとり暮らし」の人口学

最後に「ひとり暮らしの人口学」を考えてみたい。2000年の統計で、女性の単独世帯は、約593万世帯で、女性の9%だが、2025年には13%の予測が出ている。

65歳以上の女性では、5人に1人が単独世帯で、2025年にはそれが23%になる予測。日本の全世帯に対する単独世帯（男女とも）は28%、先進国の中では高いがスウェーデンよりは低い。

2025年の予測は35%で、こうして

みていると、ひとりもの、ひとりぐらしは当たり前前の社会になります。

そこでの問題は、女性は離・死別後ひとりもの人生を送る人が多く、男性は再婚のチャンスが高かったために、日本の女性はひとり暮らしや孤独に強いが、男性は弱い。生涯独身で頑張った偉大な男性は日本には少ない。しかし、20世紀の前半までヨーロッパでは生涯独身の男性が多く、カント、ニーチェ、ベートーベン、ブラームスなどにはつれあいの影はない。哲学者・科学者・音楽家など独身で功を為した人が多いのです。

近代ヨーロッパの文化は、孤独の思想の中から生まれたとも言える。

日本は、義理人情・地縁・血縁などウエットな文化を続けてきたが、これからは個性・友人・ピュアな男女関係などどちらかといえばドライな文化に変わっていくのが、文化的帰結ではないか。おひとり様は、新文化の担い手になるのです。

「ビバ！おひとり様」と結んで、阿藤先生は万雷の拍手のなかご自身の学会に翔ぶが如く帰られました。（樋口恵子・記）

当会名物寸劇「シングル・まんだら ー全5帖ー」

本邦初演 作・演出=樋口恵子/舞台監督=望月幸代

劇団WABAS 渥美雅子、稲葉敬子、小林満州子、榊原茂子、佐々木都、下村シズ子、袖井孝子、堀口雅子、松村満美子、望月幸代、谷島陽子、柳原智子、吉武輝子ほか

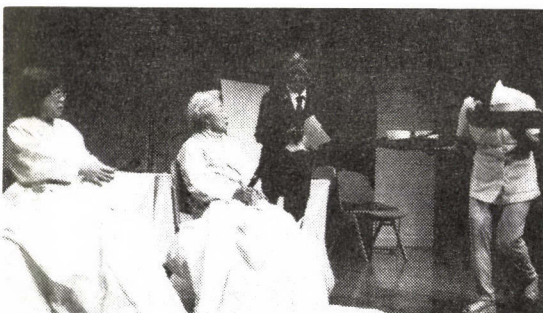
第1帖「しんだら帖」

モデルは、長野の佐々木都さん。劇中のミヤコは渥美雅子さん。死んだあとのことを書き残すことが近ごろ流行。



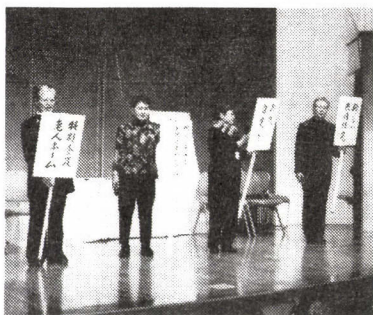
第2帖「やんだら（病んだら）帖」

病気になった時の問題を、入院中の妻の食事まで取り上げる夫の事例等紹介。



第3帖「すんだら（住んだら）帖」

終の住みかの問題を「シニア・シングル研究会」的にディスカッション。



第4帖「ぼけたら帖」

「独身婦人連盟」の活動を紹介しながら認知症になった場合の支え合い方を検証。



第5帖「ポチタマ帖」寸劇に初めて動物が登場。

ペットとシングルの結びつきの深さとそれ故の問題・課題を最新の話題満載で上演。



〈フィナーレ〉 いざ討ち入り





「枯葉」をふみしめて 生きるよろこび

なかがみ
中神

よしぞう
義三 (昭和大学医学部客員教授)

1931年広島県生まれ。1959年日本医科大学卒業。米国Duke大学客員教授、日本医科大学教授を経て現在昭和大学医学部客員教授。RFラジオ日本健康番組コーディネーター、排尿管理相談員、ICD認定医、神奈川泌尿器科学研究会代表世話人、介護老人保健施設港南あおぞら施設長、社会福祉法人ひまわり福祉会理事。

私は、1931年、広島、瀬戸内海の島に生まれ、旧制広島県立二中の2年のとき、広島原爆にあいました。(ノーモアヒロシマ)。戦後、食糧難の為、野生の草をかじりながら、生きて原爆病にさらされ、私という少年の魂の中に医者になって多くの病を治し、癒そうという意欲がみなぎってきました。私の生家は、京都公家、油小路家系図の流れではありますが、それほど裕福ではなく、6人の子供の長男として育ったので医者になりたいなどともないことでした。然し、母に私は医者になりたいと告げました。そして、2日後に母は、考え検討した結果、家の裏山に私を連れてゆき、積み重なった枯葉をふみしめながら「やる以上は、夢で終わらせてはいけません。最後までやり通しなさい。親として子供の夢をかなえてやるのが幸せなんだよ」と、私の手をにぎりしめながら、力強く励ましてくれたことが忘れられないのです。「母(女性)は強い」と思いました。私は、今日このような生き方をしているのは、母のお陰であると感謝しています。

戦後、学制改革により新制高校となり日本医大に学び医師免許を取り、米留學をし、大学教授となり定年をえて今日、現役と同じ位、多忙な毎日を送っています。そして、国際交流(台湾)の仕事や老人の介護の問題、ラジオ番組主演など、多様な仕事をしていますが、同じ年齢の方達は、老年症候群として、施設に入所したり、薬を沢山服用したりの毎日を送っておられる方が多いようですが、枯葉の如く老いを感じるのではなく、枯葉をふみしめてパリーのシャンゼリゼを歩き、風や雨の中を濡れながらの想いをいつまでも、ロマンを求め生きてゆきたいと思っています。

そして、そのように、「生きるよろこび」を感じるような毎日の生活があれば幸せであるし、時々仕事で疲れたり苦しみや悩みは、沢山あると思いますが、次の仕事に追われ、前向きに生きてゆこうと考える今日この頃です。「老」とは何でしょうか。「老」を感じてはいけません、心身共に健康で生きてゆこうと思っています。

「イブに生まれて」

こんな違う女の医療と男の医療

マリアンJ・レガト著

健学社刊 二〇〇〇円十税

女性のからだは男性のからだとは異なるのは、妊娠・出産にかかわる部分だけではなくありません。脳の構造や心臓の筋肉、さらには薬への反応や病気の影響まで、女性ならではの特徴があるのです。

この衝撃的な事実をもとに、ジェンダー・スペシフィック・メディスン（性差医療）を世界で初めて提唱したのが、コロンビア大学医学部マリアンJ・レガト教授です。

彼女が著した「EYE'S RIB」は全米ベストセラーとなり、性差医療のバイブルとして各国語に翻訳されました。性差医療の正しい知識を日本にも広めたいという私の強い思いと、私とレガト教授が培ってきた友情・信頼関係が、今回の日本語訳出版へと実を結びました。

まだ医師の間でも知られていない男の医療と女の医療の相違点を学ぶことで、女性が自分のからだ、症状について自信をもって医師に説明し、正しい医療を受けられるようになってほしい。それが、この本にこめられたレガト教授からのメッセージです。
(下村満子・記)

「50歳からの挑戦」

甘楽美登利著

グラフ社刊 一〇〇〇円十税

ふと我に返ると、今でも人の写真を撮っているなんて信じられない！とにかく始めたのが50歳。何の知識も待たず、写真店にアルバイトに入ったのがきっかけ。それから16年、一応プロの写真家になれたようです。その間の道のりをエッセイ風に書かせて頂きました。

〃何かを始めるのに遅すぎるということとはない〃

多くの皆様にそう思ってもらえます様に。

同時発売の「プチ・フランス」(グラフ社、一五〇〇円十税)は、大学時代に大好きだった「星の王子さま」の新訳本、立命館大学名誉教授、川上勉さんとの共訳です。フランス語全文付き。〃大切なことは目に見えない〃等の重要な言葉も取り上げて解説してあります。大人の為の童話です。是非ご高覧下さい。

『どくふれん』

元祖「シングル」を生きる女たち

古庄弘枝著

ジュリアン刊 一五〇〇円十税

痴呆になり、ひとり暮らしが危うくなった86歳の友人を、行政に働きかけて特養老人ホームに入所させた女性たち。自宅を子供たちに365日開放し、

「野球のおばちゃん」という愛称で親しまれている人。日英の架け橋にと、基金をつくり、ロンドン大学の卒業生に奨学金をだしている人。

友人の最後を看取り、葬式・納骨まで面倒をみる女性たち。

本書には、70代、80代、90代を志縁・創縁で生きる女性たちの多様な姿が描き出されている。

彼女らは、みな「独身婦人連盟」、通称「どくふれん(独婦連)」のメンバーだ。

1967年に結成された独婦連は、02年に35年の歴史に幕を下ろした。しかし、今なお続くメンバーの連帯は、老齡を迎えて輝きを増し、命綱となっている。

創設者・大久保さわ子さんのダイナミックな生き方と、メンバーの多彩な生き様は、連帯・ぬくもり・勇気をくれる。